

ひろば

Vol.132
HIROBA

(創立90年)

発行日：2016. 5.10 発行人：田沼 武能

〒164-8678 東京都中野区本町 2-9-5 TEL & FAX 03-5371-2732 (事務局)
<http://www.kougei-dousoukai.jp> dousoukai@kougei-dousoukai.jp (受信専用)



東京工芸大学同窓会
創立90周年記念大会の案内

若尾学長退任

卒業作品展

学位授与式・卒業祝賀会

同期会・クラス会

ひろばのページ

24期山本吉男氏 現代の名工に

≡ 9月3日(土)は、東京中野に集まりましょう！ ≡

東京工芸大学同窓会 会 長 田沼 武能
実行委員長 川名 晴美

東京工芸大学同窓会は、大正15年(1926)に東京学士会の名前で発足してから本年をもちまして、めでたくも創立90周年を迎えることになりました。

現在の同窓会の会員総数は、芸術学部卒業生を加えて22,000名を超え、更なる発展を目指しています。

つきましては創立90周年を記念して…

東京工芸大学同窓会創立90周年記念大会 記念式典・講演会・祝賀会並びにホームカミングデーを下記の要領にて、開催いたします。

本年9月3日(土)、新装整備された母校の中野キャンパスに、どうぞお集まりください。それでは当日、東京中野にて旧交の輪、親交の輪を広げましょう！

— 記 —

日 時：平成28年9月3日(土) 13時00分～17時30分

場 所：東京工芸大学 中野キャンパス
東京都中野区本町2-9-5 (☎ 03-3372-1321)

内 容：「受 付」 12時00分～
「記念式典」 13時00分～
「記念講演」 13時30分～
・ 講 師 藤嶋 昭 先生(文化功労者、東京理科大学 学長)
・ 演 題 “偉大な先人科学者に学び、これからの科学を考える”
「ホームカミングデー」 14時30分～
「祝 賀 会」 15時30分～
「お 開 き」 17時30分を予定

参 加 費：同窓会会員 3,000円 / 但し、芸術学部卒業会員(73期～)1,000円

申込締切：ご出席される方は、この会報「ひろば」に同梱のA4サイズの「ご案内」に刷り込まれているハガキにより6月30日(木)までにご返信のうえ、当日ご来場ください。

※学内見学をご希望の方には、午前10時30分よりご案内を開始いたします。

※ホームカミングデーでの顕彰者は、卒業後25周年(第66期生)、50周年(第41期生)を迎えた方々と、50周年より前の卒業生(第40期生以前)で、今回初めて参加された方となります。

※なお、翌4日には「全国支部長会議」を開催いたします。支部長殿には、別途ご案内をいたしますが、予め、この日程を確保下さいますよう、お願い申し上げます。

東京工芸大学同窓会創立90周年記念大会

<記念講演について>

記念講演会の講師には、文化功労者で東京理科大学学長の藤嶋 昭先生をお招きします。

藤嶋 昭先生は東京大学大学院時代に、東京工芸大学・第三代学長の菊池 真一先生、並びに第五代学長の本多 健一先生の研究室にて研鑽され、光触媒の「ホンダ・フジシマ効果」を発見し実用化したことから、国際的にも高い評価を得ておられます。

現在では「光触媒」技術として、ビル外壁の汚れ防止対策やエアコン中への光触媒フィルター導入による抗菌対策などの形で工業製品に広く応用されており、その市場規模は着実に拡大しています。それらから、例年秋口を迎えますと、ノーベル化学賞の有力候補者として注目を集める、現役の研究者でもあります。

藤嶋 昭先生のご講演に、どうぞご期待ください。



演題

「偉大な先人科学者に学び、これからの科学を考える」
… 光に関与したニュートンやアインシュタインを例として …

講師

藤嶋 昭(ふじしま あきら)先生・工学博士(専門は光触媒、機能材料化学)

☆ 略 歴

1942年 東京都生まれ。71年 東京大学大学院博士課程修了。75年 東京大学工学部講師。76～77年 テキサス大学オースチン校博士研究員。78年 東京大学工学部助教授。86年 東京大学工学部教授。95年 東京大学大学院工学系研究科教授。2003年 神奈川科学技術アカデミー理事長、東京大学名誉教授。05年 東京大学特別栄誉教授、日本学術会議会員。06年 日本化学会会長。10年 東京理科大学学長(現在に至る)

1983年「朝日賞」。2000年「日本化学会賞」。2003年「The Gerischer Award」、「紫綬褒章」。04年「日本国際賞」、「日本学士院賞」。05年「APA Award」。06年「神奈川文化賞」、「恩賜発明賞」。10年「文化功労者」、「川崎市文化賞」。11年「日本写真学会名誉賞」、「The Luigi Galvani Medal」など受賞多数。

2015 フォックス・タルボット賞



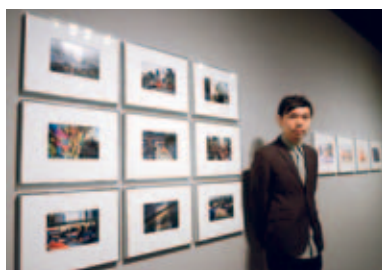
2015フォックス・タルボット賞は10月1日に審査が行なわれ、下記の方々が受賞しました。



2015 フォックス・タルボット賞 入賞作品発表

第一席	変わった風景	伍 永健	芸術学部写真学科2015年卒業
第二席	crevasse	田辺 眞	芸術学部写真学科4年
第三席	Inspiration	菊池 亮佑	芸術学部写真学科3年
佳作	僕的一天	竺 為	芸術学部写真学科1年
佳作	水色	孫 華	芸術学部写真学科2014年卒業
佳作	中国の剰女のラブライター	蔣 沫琳	芸術学研究科修士2年
佳作	災害の爪痕	本間 高大	芸術学部写真学科4年
佳作	海しらせの合図	高田 有輝	芸術学部写真学科4年
モノクロ賞	覆い重なる雲を見ていた	西井 知早	芸術学部写真学科4年

審査委員の先生方 田沼 武能(委員長・24期) 細江 英公(29期) 中谷 吉隆(32期) 立木 義浩(33期) 小林 紀晴(63期) (敬称略)



フォックス・タルボット賞は、写真表現に情熱を傾ける若い写真家の登竜門としての役割の他、国際的視野をもった写真家を育成することを目的に、1979年東京工芸大学短期大学部に設けられ、今回で第37回を迎えることになりました。

第一席には伍 永健(ゴ・エイケン)さんが選ばれました。母国でおこった大規模な抗議デモの様子を、異邦人のような乾いたまなざしで淡々ととらえることにより、見る者は、感情にまかせることなく、静かにこの光景の意味を考えることのできる秀作です。

圓井 義典(フォックス・タルボット賞運営委員)

2015年 ホームカミングデー

2015年10月11日、中野祭期間中の中野キャンパスで第6回ホームカミングデーが開催されました。当日は卒業生65名、教員10名、計75名様が参加されました。これは前年の58名(中野・厚木の2会場合計)より3割増となっております。参加者の内、顕彰者(40期以前・65期)は合わせて18名でした。ご参加くださった同窓生の皆様ありがとうございました。



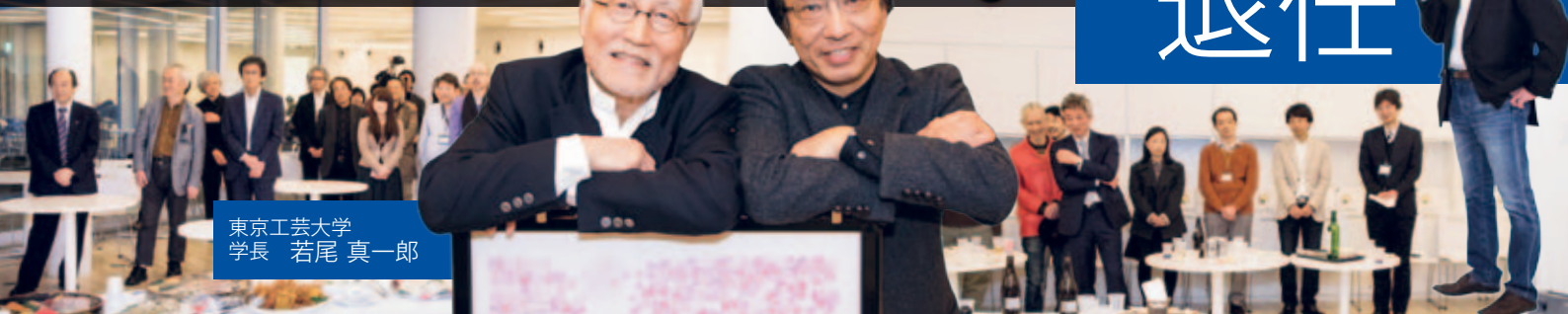
3月25日に「After5は男と女」と題して最終記念講義と、「囲む会」が開かれました。先生からこれまで同窓会活動に
頂戴した多大なご理解とご協力に感謝申し上げますと共に今後のご活躍を楽しみにしてまいります。



WAKAO SHINICHIRO

若尾真一郎

学長 退任



東京工芸大学
学長 若尾 真一郎

「**おもしろい芸術学部**」を目指して

このたび、私は2016年3月末をもって学長職を退任いたしました。2期8年間に亘る重責を終え、安堵の気持ちとともに、一抹の寂しさを感じているところでもあります。在職中は、東京工芸大学同窓会の皆様には多大なご理解とご支援を賜り、ここに改めて厚く御礼申し上げます。

8年前、本学の長い歴史の中で、初めての芸術系出身の学長として就任し、どのように舵取りをしていくべきかと深く考えたことを、つい昨日のこのように思い出します。私は、他大学の中で一番を目指すよりも、他にはない東京工芸大学を目指してまいりました。それが「面白い大学」であり、「おもしろい芸術学部」です。1期目には本学初の両学部教員による教育研究成果の情報発信として、厚木キャンパスで「みらい博2009」を開催いたしました。工学部と芸術学部があることのおもしろさを実感したイベントでした。2期目には、芸術学部長とともに「芸術学部フェスタ2014」を開催し、新しく整備された中野キャンパスから、芸術学部教員の教育研究成果の情報発信を行いました。私自身も芸術学部の様々な専門分野の先生方と共同で作品発表を行わせていただき、改めてメディア芸術の奥深さやおもしろさ、可能性を実感いたしました。本学の芸術学部には、至る所に「おもしろいこと」が転がっているのです。

私自身はイラストレーターとして、また、若い学生を教育する立場として、好きなこと、おもしろいと思えることを仕事にすることができました。それは理想的なことですが、

多くの場合、理想どおりにはいかないものです。

本学芸術学部は、教職員が一丸となって学生の理想を叶えることができるよう、その手助けをしていくことが使命であると考えております。

東京工芸大学同窓会の皆様には、これから芸術学部の未来を力強く、そして温かく支えていただけましたら幸いです。

最後に、同窓会の皆様、教職員の皆様への感謝の気持ちと意思を込めて、この言葉で締めくくらせていただきます。

「おもしろい芸術学部、万歳！」

● 会場での集合写真とスナップは下記で2016.8.31まで閲覧とダウンロードが出来ます。
<http://www.kougei-dousoukai.jp/board>



写真学科

Photography

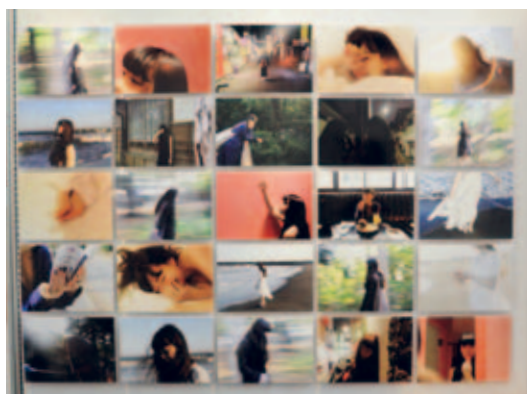
卒業展



「See,Look」 横田 裕子



「変わらない場所にも時間の経過があった」 武者 愛由香



「Go around」 西川 真央



作品に
寄せて

「花を葬る」 望月 あかね

“母”と母を追う“自分”に向き合った日々。
私は、自らの感情の在処を捜していたのだと
気付かされた。
私は母を見つめる、
その眼差しの行方に今、辿り着く。



「然らば」 東海林 波王



「そして、陰は巡る」 西井 知早

学科のトピックス

近年の写真学科は、学内外での作品展示・発表を積極的に行っています。年度末には、「写真学科スペシャル」「Recommend展」を柱として、今年度は、キャノンオープンギャラリー2(品川)で「日本大学芸術学部写真学科・東京工芸大学芸術学部写真学科合同写真展」を開催しました。「写真学科スペシャル」とは、1～3年の後期制作、4年の卒業制作から選ばれた作品を展示し、公開審査・プレゼンテーションを経てグランプリ作品を決定するイベントです。最終日には学科の全学年の学生や卒業生のほか、写真学科にゆかりのある方々が集まり、交

流パーティーで締めくくりました。パーティーでは、トークショーやサプライズ企画が目白押しで、大盛況でした。写真学科が一体となり、団結力を感じた1日になりました。今年で5年目となった「Recommend展」は、写真学科の教員が、卒業制作の中から1作品を推薦し、展示をプロデュースする写真展です。ニコンサロンbis新宿の会場に、個性豊かな11作品が出揃いました。そしてキャノンギャラリーでの日大との合同写真展。約1か月の期間に、第1部・日大写真展、第2部・工芸大写真展、第3部・日大&工芸大合同写真展が開催されま

した。こちらは同じ「写真学科」を持つ2つの大学の、東京では初の共演となり、それぞれの大学の「色」が見えた貴重な展示となりました。写真学科は工芸大にとってはルーツの学科です。今後も、これまで先輩方が培ってきた伝統をベースに、のびのびとした自由な雰囲気の中で、学生の豊かな感性・確かな技術によって生み出される作品を発表していきます。

写真学科 准教授 上田 耕一郎

写真学科スペシャル



Recommend展2016



日大・工芸大 合同写真展



卒業生のことば



武者 愛由香 さん

私が東京工芸大学に入学するきっかけは、小学生の時でした。中野キャンパスの目の前にある小学校に通っていて、5年生の頃、工芸大で行なわれたワークショップに参加しました。内容はピンホールカメラによる撮影とプリントでした。当時のことは今でも鮮明に覚えています。ピンホールカメラを自分の手で組み立て校内にある被写体を探し、15分ほどシャッターを開けました。そして撮影した印画紙を暗室でプリントしました。部屋が暗く恐かったことを覚えています。高校生になり将来のことを考え、その頃の思い出が蘇り工芸大に進学しました。入学当初はあまり写真に身

が入らず、課題をこなすだけでした。3年生のある日、小学校が数年後に閉校することを聞きました。自分にできることは何かと考え、閉校するまでの残された時間を作品として残すことにしました。中判カメラや大判カメラを使い、フィルムで1枚1枚の写真を丁寧に制作していきました。小学生の時の記憶がきっかけとなり、4年間写真を学び、学んだことを活かしてきっかけになった場所を撮影しています。両方の学校があったからこそ今の私があります。

映像学科

Imaging Art

卒業展



「ALIVE」 谷浦 優

作品に
寄せて

「KODOU」 中村 実緒

心臓の鼓動とともに、感情が思い出される。

言葉にできない、感情を、2人のダンサーによって、表現する。

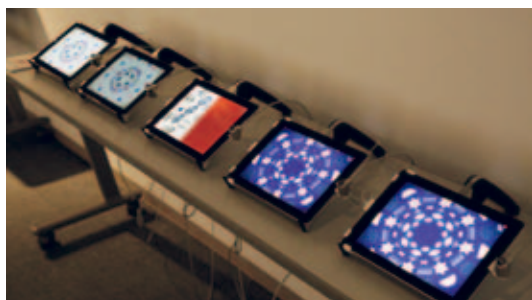
幼少からダンスを学んでおり、ダンスについての映像を制作してみたいと思った。2人のダンサーを振り付けることで、生命の躍動感を表現し、人間の心の奥にある力強い感情を表現した。踊りは私の言葉であり、本当の感情を伝える唯一の方法である。



「夢中-ユメナカ-」 秋林 瑠美



「COLOR」 後藤 玲奈



「Sleeping Beauty」 望月 龍太

学科のトピックス

卒業生の活躍

本年度、映像学科卒業生の作品3本が海を渡りました。

まず、昨年10月韓国・金浦でおこなわれた第10回アジア国際青少年映画祭にて2013年度卒業作品「island」が上映され第3位に当たる銅龍賞を受賞いたしました。閉校される高校という空間の舞台に男子2名、女子1名の高校生の奇妙な関係を繊細に描いています。監督は田村凌一君。彼は在学時から自主制作を盛んに制作し高い評価を得ていました。また初期の作品から田村君の脚本を担当していたのは同期の内田裕基君。現在はウルトラマンシリーズ等の脚本を手掛けプロとして活躍しています。

同時期、同じ韓国・釜山では第2回アジア学生映画祭が開催されました。広くアジアに才能を求めた本映画祭はモロッコやベトナムという国の学校からの出品もあり映画祭の多彩さが目立ちました。本映画祭では2014年度卒業作品、富田洋史君の「ふたり、ふたつの再見」と韓国のJUNG Ju-yeongさんの「ナバン」「蛾」の2作品が本学から上映されました。「ふたり、ふたつの再見」は地方都市での豊かな自然と切ない高校生の感情の機微、映画への愛を語っています。また「ナバン」「蛾」はほとんど暴力的な兄弟の偏った愛情を描いています。

これからも映像学科の学生作品は広く世界へ向けて発信されることでしょう。海外へ見聞を向け己の研鑽に励むことを期待いたします。

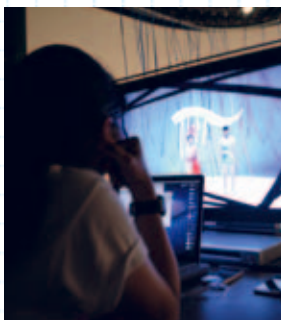
映像学科 教授 高山 隆一



高校生のための 映画リテラシー講座

映像学科の卒業制作展は中野キャンパスで開催されました。2日目には、映画監督 塚本晋也氏と高山隆一教授が対談形式ですめる「高校生のための映画リテラシー講座」が開かれました。

卒業生のことば



中村 実緒 さん

「あっという間で濃密な時間」

「大学生活はあっという間」とよく言いますが、4年間を振り返ってみると、本当にあっという間でした。しかし、「あっという間」な4年間の中身はとても濃密なものでした。

大学生活では、委員会に入り、学園祭を運営したり、舞台上でダンスを踊ったり、制作現場でアルバイトなどたくさんの挑戦をしました。その中でも自主制作に1番力を入れ、1年生から4年生まで10作品ほどを制作しました。

1年生の頃は皆で美術を作り、カメラを回し、編集をしました。それはとても大変でしたが、様々な

部署の仕事を経験できる貴重な時間でした。4年生の頃には各自希望の部署に分かれ、作品制作に臨んだため、会議から撮影、編集までスムーズに行うことができました。1年生の頃から自主制作を行っていたため、就職活動の際には『なぜその部署を希望するのか』という質問に対して、実体験を通して伝えることができ、内定を頂くことができました。

「あっという間」で濃密な4年間は、私を大きく成長させてくれました。これからは社会人としてたくさん経験し、成長していこうと思います。

デザイン学科 VCコース

Visual Communication Course

卒業展



「en」 田島 舞



「A flower grown by teardrops」 工藤 飛海



「BLANK」 関 真理



「井戸」 宇津木 幸治

何かを探し求めているにもかかわらず、まわりの環境はそれを提供することができない。そこに始まる精神状態の変化を小説や詩の中からとりあげて描いた。垂直に伸び、日常から自分を隔絶する、深く暗いところに繋がる通路。「井戸」という言葉を借りた。

この作品は、自分が抱える心の奥底

の問題と向き合い、乗り越えるために作った。一つにはこころが死にゆく感覚を、一つには割り切れず燃える醜い怒りを、一つには周囲に対する嫌悪感と諦めを、代弁してもらった。描いて、描いて、対象化した。辺りを見渡し、足元を確かめて、這い上がる。



「find of smell」 山口 慶

学科のトピックス

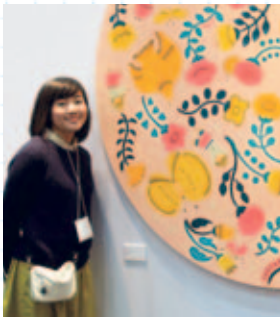
大船渡で巨大貝殻アート

昨年3月に卒業した千葉紘香は、5年前、大地震の後、壮絶な津波に襲われた大船渡の出身です。今年2016年の元日の朝、NHKのお正月番組に出演しました。大船渡の綾里漁港で大勢の人たちと制作した巨大貝殻アートが取材されました。テーマは「朝日を浴びた大船渡の海」です。「大船渡の海」を特産物のいろいろな種類の6000枚以上の貝殻を使って作品にするということで、震災から徐々に復興してきた「海と共に暮らす大船渡」のひとつのかたちが表現されました。貝殻たちは海と深く関わった港町大船渡の生活のなかで生まれたものです。それを使ってみんなで力を合わせ「海の絵」を描くことができたということは、千葉にとってもこの地域の人々にとってもとても大きな意味があったようです。千葉は、この作品を作るためにたくさんの地元の方々と繋がり、交流をしながら準備を進めました。関わったみなさんが楽しんで「海の絵」を制作したことが、なにより思いの込もった作品となったと話しています。復興はまだまだこれからのようですが、大船渡のみなさまと子どもたちの心の中に宿った暖かい思い出がその力となっていくといいですね。

デザイン学科 教授 谷口 広樹



卒業生のことば



田島 舞 さん

この東京工芸大学で4年間を過ごすことができ、幸せでした。きっとこの大学へ行っても、自分なりに楽しい大学生活を送っていただろうと思うけれど、私は工芸大でみんなや先生方と出会って、共に学べたことがとても楽しくうれしかったです。この学校やみんなが纏っている空気感、雰囲気合っていたんだと思います。とても居心地が良かったです。この4年間は課題と自主制作のバランスがうまく取れず落ち込んだり、自分の表現やこれからの道が定まらずに焦ったり、悩んだり、試したりのくり返してました。しかし、そんな時間があつたからこそこの今で、決して無駄ではなく必要

な迷いであつたと思います。そんなときの周りのみんなや先生方の存在がとても大きく、支えられ、救われました。大学生活は、何をやっても間違いはない、いつ始めても遅くない、と気づいたとき少し気持ちが楽になりました。今後も共に頑張っていきたいと思える仲間にも出会え、卒業研究はきちんとやりきることができました。これで終わりではなく、むしろすべてがこれから始まるという気持ちです。この4年間を応援してくださった家族、学務課の方々には特にたくさんのありがとうございました。を伝えたいです。

デザイン学科 HPコース

Human Product Course

卒業展



「Space making」 岡野 采那



「KALEIDO WARP」 加藤 彩



「除染作業員」 竹内 瑠美



「hanabi」 清水 さやか

寄せて
作品に

江戸時代、線香花火は香炉に立てて一本一本を大切に楽しまれていました。その楽しみ方を現代によみがえらせた作品がこのhanabiです。海外で安価に生産できることから一時は姿を消してしまった国産の花火。その職人技と美しさを、日本の心をもってじっくりと楽しんでほしい。

い。そんな思いを込めて制作しました。江戸時代の花火と異なるのは、芯がお香でできているところ。花火の後は香りだけを残して灰となるため、遊び終わった花火を水バケツに放り込むさみしさもありません。花火を観賞した後は、心地よい香りの中でくつろぎの時間を。



「お風呂」 武内 賢太



「祝う藍」 翁 詠莉

学科のトピックス

今年で3回目となる3年次学生による「カンサツ カンカク カタチ展(カカカ展)」が2015年12月4日から3日間、恵比寿のギャラリーHALOにて開催されました。プロダクトデザイナーの桑野陽平氏(株式会社 YOHEI KUWANO DESIGN STUDIO)を迎え、前期期間中定期的に行ったワークショップの成果発表展示会です。生活の中

で起きている様々な些細な現象を客観的に捉え、多くの人が自分でも気付いていない様な潜在的な問題点や行為に対する解決策をプロダクトとして具体化していく「オブザーベーション(観察)」という手法を用いたワークショップです。授業の課題としては前期で終了しましたが、以降ワークショップ参加学生からの有志が、夏期休業含め展

示会開催直前まで多忙な桑野氏のスタジオに押しかけ指導を仰ぎ、ブラッシュアップを重ねました。最終的にはコーヒーカップのソーサーや水筒、梱包用ガムテープや自転車のサドルなどといった身近な生活用品を対象とした12作品が提案されました。

デザイン学科 准教授 永井 孝也



卒業生のことば



清水 さやか さん

「工芸大に入学させてください、必ず毎年特待生になるから！」この一言を発してから、気づけば4年が経っていました。高校では化学を専攻していたこともあり、デザイン分野への進路変更は両親に相当な心配をかけていたと思います。大学ではデッサンも描けず、アイデアもつまらないと言われ、入学当初は悔し涙をこらえながら授業を受ける日々でした。そんな中で、あ、特待生なんて無理だと思い始めたときに覚えているのが、「デザインは積み重ねである。」という教授の一言です。何もデザインのことを知らなくても、少しずつ知識や技術を積み重ねればよいものが作れる。その

言葉と出会えたからこそ、辛い時期を乗り越えることが出来たように思います。

そしていま、冒頭の約束ですが…なんとか最後まで守ることができました。なんとか…ですが。辛くても苦しくても自分で言ったことを守る。その時やるべきことをやる。当たり前のことですが、その大切さを知る機会をくれた両親、支えてくださった教授の方々、友人、出会った人すべてに感謝しています。今後はそうした方々を少しでも素敵な気持ちにできるものを作り、それによって自分自身をさらに成長させられたらな、と考えています。

デザイン学科 DCコース

Digital Communication Course

卒業展



「LEAF LINK LIGHT」 山本 香織



「赤辞典」 太田 美和



「はつミツ」 平原 勝憲



「汚食器セット」 麻生 若菜



寄せて
作品に

「今澆き」 加藤 貴也

つぶやきによって「今」を伝えるTwitter。五・七・五で当時の「今」を詠っていた江戸川柳。このふたつの共通点とそれぞれの特徴を活かすことができれば、一瞬一瞬で変わり続ける現代の世の中のトレンドを、「短歌を詠む」という日本人特有の解釈によって感じられるのではないかと考えました。きっかけは小

学校の頃、授業で紙澆きを体験したことにあります。そこにゼミでの研究内容を重ね合わせ、インターフェースとしての紙澆きの性質を研究する内にこの作品が生まれました。個人制作という意識を捨て、周りの人々に相談しながら何度も手直ししたことが、完成度を高められた一番の理由だと思います。



「麻からハイタッチ」 西巻 奈緒



「オノマトペメガネMV」 松山 結子



「うしうみうしうし」 三浦 李麻

学科のトピックス

昨年、映像デザイン研究室では豊橋市のこども未来館ココニコとの共同プロジェクトを行いました。8月29日(土)～9月15日(火)こども未来館で開催された夏のイベント『ゴーストの部屋』の展示コンテンツの企画と制作です。

インタラクティブな仕掛けのある様々な映像コンテンツで、子ども達に不思議な体験を

してもらうために様々なアイデアを盛り込みました。

制作したコンテンツは7つ。デジタルだけではなく、オブジェや絵画等も含め、触って楽しむ『不思議』を皆で提案し、オリジナルキャラクターで制作しました。こども未来館の展示室の中をゴーストの家にみたく、来場者には屋敷の中を歩き回るよ

うな演出になっています。

こども未来館のキュレーターの方と一緒に企画を立てるところから始めたプロジェクトでしたので、なかなか大変な作業ではありましたが、参加した学生達は大変良い経験になったと思います。

デザイン学科 教授 田邊 順子



写真1



写真2



写真3

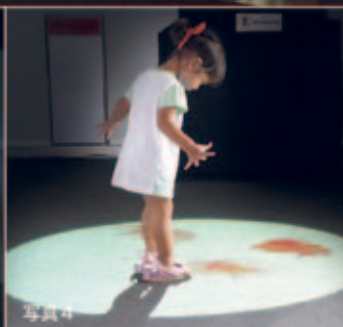


写真4



写真5

(写真1)リビングルーム：
ライブカメラを使って、ソファに座った来場者を壁に投影し、そこにゴースト達が現れます。

(写真2)廊下：
エントランスから奥へ続く廊下には、10枚の逆さ絵を展示しています。上下逆さにして2つの物が見える絵を制作しました。

(写真3)窓：
壁に作った窓枠の中に映像を投影し、人々が通るとゴーストが飛び回ります。

(写真4)エントランス：
入り口の床には架空の動物達が動き回って来場者を迎えます。

卒業生のことば



加藤 貴也 さん

「これまでの出会いにありがとう」

私は高校の頃に少しだけデザインを学び、それがきっかけでこの大学に入りました。ですが当時、芸術という分野を志すことには不安しかありませんでした。なにせ自分は絵心がある訳でもなく、手先が器用な方でもありません。ただ興味があつたというだけで、そこに適性があるかどうかなど、今まで考えてこなかったのです。なので大学では、初めてのこと・苦手なこと・一人ではできないこと…それらに手探りで挑みながら4年間を過ごしました。その殆どが失敗に終わりましたが、それでも後悔無く卒業できるのは、数々の

「良き出会い」があつたからだと思います。良き友達から広くを学び、良き研究室で深くを学び、良き先生から成功と失敗の違いを教わり、良き先輩の背中を追い、良き後輩達に伝えられるよう努力し、…そうしてやっと、胸を張って誇れる「自分」と出会えたのだと思えます。

これまでと、これからの出会いを大切に、春からはデザイナーとして社会に貢献していきます。東京工芸大学という学び舎との出会いに感謝を込めて…本当にありがとうございました！

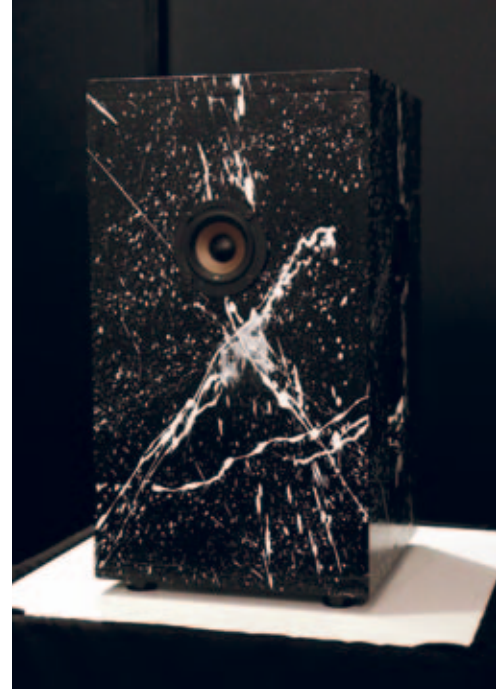
インタラクティブ メディア学科

Interactive Media

卒業展



「国言葉が。。。」 Kang Min Ju



「Four Ways Speaker」 古木 滉太



左：「MIX!MIX!MIX!」 北村 悠一 右：「世界の均衡」 佐々木 拓也



「トインテリア」 山田 聖実



「バーチャルリアリティー軍艦乗船体験」 小泉 耀平



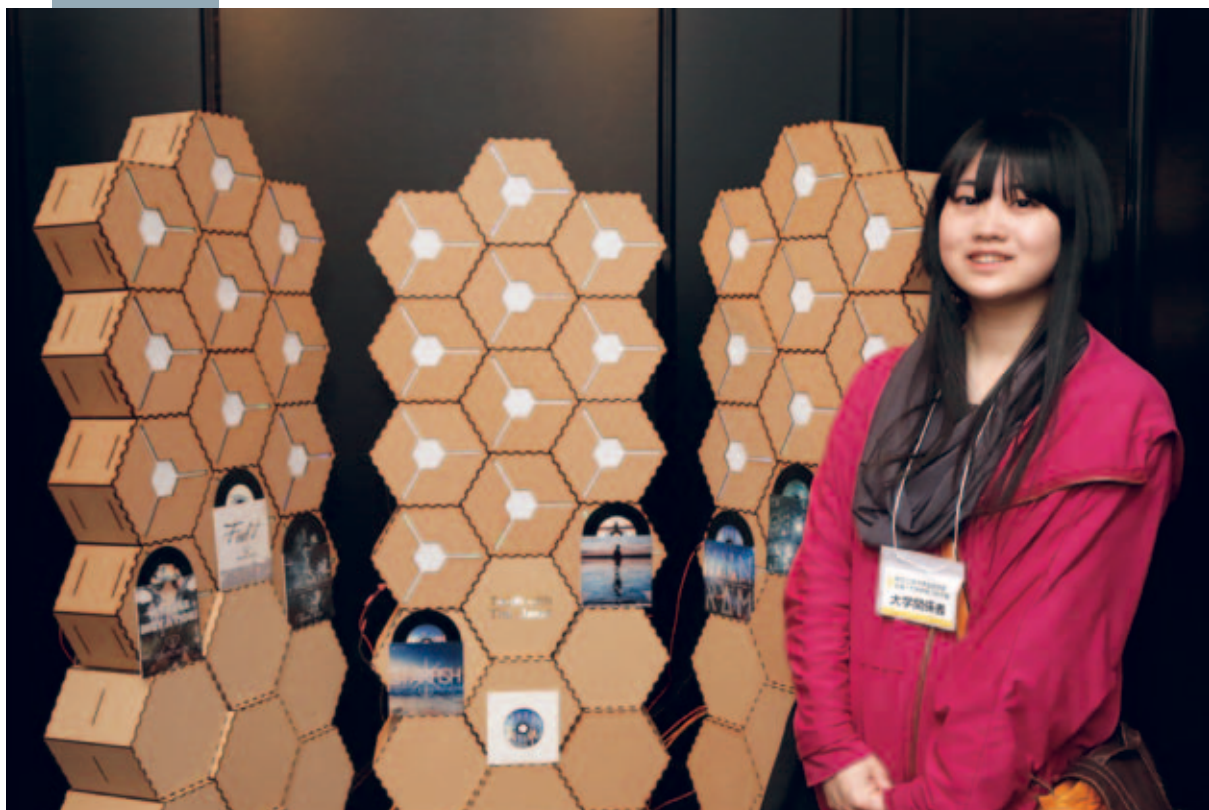
「生物兵器：脱走」 小野 桂逸

作品に
寄せて

「重箱-Jukebako- [視聴機型]」 荻原 絵里香

一個一個を積み上げて好きな形にすることができる六角形の照明スピーカー「重箱-Jukebako-」今回は飾ってあるジャケットをかざす事により、その音楽が流れ光で彩るジュークボックスの視聴機型としての展示です。この作品の並んでいるジャケットの曲たちは主にダウンロード販売さ

れているものなのですが、それをあえてCDのような媒体としてリアルモノとして配置し、まるでCDショップでジャケットを見て選ぶような感覚で楽曲と出会う、そのような感じの新たな楽曲との出会いの架け橋になる作品を創ろうと思いこのようになりしました。





「調和」 荒木 佑季美



学科のトピック



「インタラクティブな世界 動くアート展」

福島県福島市こどもの夢を育む施設 こむこむ館で開催

「生まれ故郷に自分達の活動を紹介したい」という学生の思いから2014年に始まった、触って遊べる体験型インタラクティブアートの展覧会「インタラクティブな世界 動くアート展」(福島県福島市)。今年で4年目を迎えた本展は、「福島市こどもの夢を育む施設 こむこむ館」のご協力の下、3月12日～13日の2日間、企画展示室の大空間を使って東京工芸大学 芸術学部 インタラクティブメディア学科で

インタラクティブアートを学ぶ学生たちの作品と教員作品22作品を展示し、デジタル技術を駆使した作品から着ぐるみロボットまで、様々なタイプの参加型作品をご紹介しました。地元紙2紙にカラー写真付きで取り上げて頂いたこともあってか、2日間の総入場者数は1200人を越え、小さなお子様から大人まで様々な層のお客様で大変な賑わいとなりました。活動の継続には様々な苦勞がありました。こうして多く

の方にお越し頂き、展覧会を通して沢山の笑顔に出会えたことは大変ありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。

インタラクティブな世界 動くアート展 2016 ホームページ

<http://ugokuart2016.tumblr.com>

インタラクティブメディア学科
准教授 浅野 耕平

アニメーション 学科

Animation

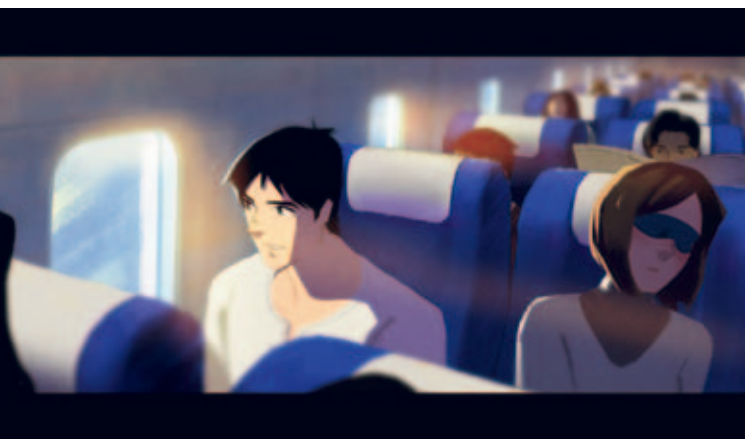
卒業展



作品に
寄せて

「THE RAID」 朱 興翔

廃墟を舞台にしたSFアクション映画のトレーラーを作りたいという発想からの作品です。手法はフル3DCGアニメーションとなっています。キャラクターはCGセルルックで、手描きの良さを表現しようとした。内容は至ってシンプルなので、気軽に見て頂けるよう制作しました。



「Travel」 チンドウネン



「サマーナイトタウン」 向井 円



「暴走猿人」 山腰 時



「ノアの□庭」 狩野 洋典

学科のトピックス

木船ゼミ展2016によせて

2003年にアニメーション学科が設立し、2006年度の2期生が開催した初めてのゼミ展から10回目になる今年は、卒業生にも声をかけ3年生と合わせ80余の作品が集まる盛大なゼミ展になりました。先輩との直接的な触れ合いの中で受ける指導、学生の質問形式で進行する卒業生15名によるトークセッション5本立て等、在学生在が社会性を養う上で良い機会となり、進路を決める時期とも重なり周近で見る先輩の姿は大きな

励みになり参考になった事と思います。

アニメーションを学術として研究・指導する国内初の学科であり、設立当初は試行錯誤とチャレンジの連続だったように思います。しかし、この10年を振り返ってアニメーションという未知の世界に飛び込んだ学生が教員との出会いや、授業での様々な体験や修練を経て成長し羽ばたいていき、在校生に自分の経験を教授してくれる。そんな時が来たのだと感慨深く思います。動

かす事、作品を完成させる感動や喜びの体験、自分で探究、研究する姿勢を持つ事、得意を伸ばしニガテを克服させながら社会へと橋渡ししていく。一人ひとりの個性を大切に指導しています。ゼミ展10周年の節目を超えて次のチャレンジをどう進めるか、楽しみな春を迎えました。

アニメーション学科 教授 木船 園子



卒業生のことば



中山 大輔 さん

「出会いに感謝！」

入学したばかりの頃、大学という場所は毎日何か面白いことが起こるレジャー施設のように感じていました。同級生は皆同じ志を持った仲間であり、こんなに居心地の良い環境は他にはないと思いました。大学の楽しさに味を占めた自分は、一年生の頃から多数の企画に参加し、ただ自己の欲求を満たす事だけに邁進していました。

そんな自分の転機となったのが、三年生から参加したオープンキャンパスでした。ここにおけるスタッフの使命は、大まかに言えば来場された方に大学の良さを知ってもらう事です。初めのうちは、いずれ後輩になるかもしれない子たちに大学の好きな所を紹

介できるなんて楽しい仕事だなあと、漠然と考えていました。しかしこの状況を楽しいと考える感性こそ経験により磨かれた自分の長所であり、それまで面白く過ごす為に費やしてきた時間もちゃんと糧になっていたのだという事を周囲の人たちが気付かせてくれました。この経験から自分は、他者との関わりはただ楽しいだけでなく、自身の成長を促してくれるものなのだ実感しました。そういった多くの人との繋がりがこそ、自分が四年間の大学生活で得た一番の財産です。卒業後もお世話になった人たちへの感謝の気持ちは忘れず、更に自分の世界を広げるべく、積極的に人と関わる生き方をしていきたいと思っています。

ゲーム学科

Game

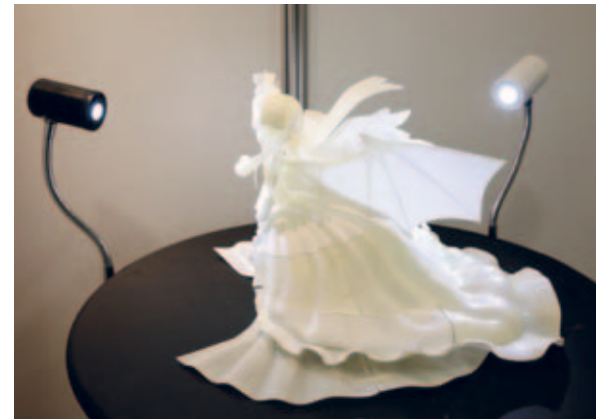
卒業展



ALLRANGEチーム作品



「打々拳」 松井 秀



「メルト・ボーダー」 鈴木 文菜



walkplayチーム作品



「マニカルコミック」 時田 滯

作品に
寄せて

卒業制作展で目立つものが作りたい、その思いがこの作品を生み出すきっかけでした。目立たせるには体を動かす方が良いだろう、何かモノがあった方が良くだろうと考え、リズムに乗ってサンドバッグを叩く、今の形へと至りました。リズムゲームに近いものではありませんが、その

色は極限まで薄められていて、細かいことは気にせずに、誰でも気持ち良くサンドバッグを叩いて自分に酔えるような作りを目指しています。実際の卒業制作展では、有り難いことに大変なご好評を頂き、当初の目的は無事に果たされました。嬉しい限りです！

学科のトピックス



ゲームクリエイターズフェスタ



映画「ピクセル」に出演中の岩谷 徹 教授

ゲームコース・ゲーム学科卒業生の皆様、お久しぶりです！

ゲーム学科主任の中島です。今年も盛大に卒業制作展を開催することができました。OBOGの方々も多数ご来場いただき、「毎年派手になっていきますね！」とのお言葉を頂戴しました。今年も昨年同様、ブース全体がほぼ「ゲームセンター」の様相を呈し、VRシステム「Oculus Rift」を使った仮想体験型のもの、サンドバック型のもの、プロジェクションマッピングを利用したもの…などバラエティーに富み、従来型ゲームコントローラを使った展示はほとんどありませんでした。「お客様を楽しませたい！」その一心で作上げた渾身の作品群。大勢のお客様の笑顔で1年間の苦労が吹き飛んだことでしょう。

さて、今年度は岩谷教授も出演した映画「ピクセル」が9月に公開されたり、11月には中野キャンパスで「ゲームクリエイターズフェスタ2015」を開催したりと、学科知名度アップを図った1年でした。ゲーム業界の好調な業績から本学科の就職率も年々上昇しております。来年度も積極採用の方針と聞いておりますので、OBOGの皆様におかれましては是非、本学科卒業生をお引き立ていただければ幸いです。

ゲーム学科 教授 中島 信貴

卒業生のことば



嶋田 あずさ さん

「ふりかえった先の景色」

私は入学してから今までの間に、6つのゲームを制作しました。入学当時、こんな自分がチーム制作なんてできるのだろうか、という不安で一杯でしたが、必死で食らいついていく内に、そんなことを気にする余裕も(時間も)なくなりました。

4年の初め、卒制の企画会議で自分の企画書をプレゼンする時は、夢物語を皆に話すようで、とても恥ずかしかった思い出があります。ですがその企画に集まってくれたメンバーのおかげで、一枚の紙べらから立派なゲーム作品へと生まれ変わりました。直前まで企画書を出そうが悩んでいた頃を思い出すと、あの時勇気を出して本当に良

かったなあ、と、今、心からそう思います。

卒展が無事終わり、しばらくして私は「山」を見つけました。今までは、卒業制作が私の登っている山でしたが、遊んでくださった人達の反応を貰うことで、自分の知りたかった答えを少し得ることができました。そこからは、今まで歩いてきた道と、今まで見えなかった景色が見え、またひとつ、新しい山に好奇心がわきました。そうやって、自分の中に転がる「面白いかもしれない」という鈍い光を見つけ、山頂目指して歩いて行きたいと思います。楽しくスキップをしながら。

マンガ学科

Manga

卒業展



「かおすく！」 岡野 悠斗



「咲愛(サクラブ)」 伊藤 優子



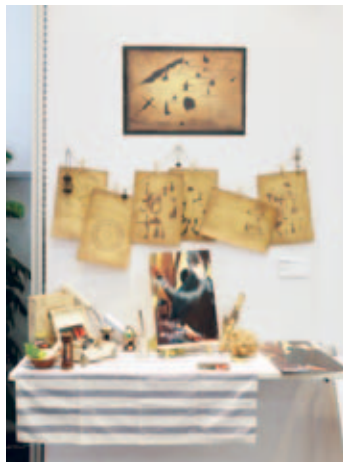
「さとみちゃんは惚れっぼい」 森田 彩貴



「マンガ・イラスト・音楽作品」 大宮 明人



「あの人は！」 國原 未央



「熾火と旅商人 an endless journey」 小松 栄太



「ワンダーハートすくらっぷぶっく」 田部 詩織



「フーリッシュヒーロー AAA」 中村 雅

作品に寄せて

「Dream Taylor ドリーム・テイラー」 益子 鈴菜

19世紀の英国を舞台に仕立て屋見習いの少年が、夢を目指し奮闘する物語で、ずっとヴィクトリア朝の時代が描きたかったのが、卒制として完成させることができ本当に良かったです。「どうしてマンガを描こうと思ったのか？」と初心に戻り、「好きなことをする時の楽しさと辛さ」を考えた時にテーマが浮かびました。時代背景を調べるのに苦労したのと、主人公と貴族の父親の葛藤をどう解決するか悩みましたが、ゼミのよし先生のアドバイスが役立ちました。最後の最後に賞を頂けたので嬉しいです。今後もっと面白いものを描けるよう精進します。



学科のトピック

マンガ学科の各種“地域活性化”プロジェクト

マンガ学科が大きなテーマとしている“地域活性化”のプロジェクトとして、まず「南足柄市・金太郎プロジェクト」(2010～12年)があり、地元のキャラクター(金太郎、天狗)をモチーフに新しいマンガを制作。地域の小・中学生に故郷の特色を伝える作品集『金太郎マガジン』を発行しました。

また、学生有志の「マンガ似顔絵チーム」(1期生から9期生までが参加)を結成し、厚木市ほか神奈川県下の多様なイベントに参

加。“早い・安い・面白い”をモットーに、老若男女の方々の“いい顔”を描かせてもらっています。

その他、小中学生に学生が指導する「マンガ教室」も各地で展開。さらに、地元の伝説・歴史や産業、また工学部のユニークな研究(例えばサッカーをするロボットなど)を取材してマンガを作る、「フィールドワーク」という演習も毎年行っています。

2015年の夏は課外活動として、藤沢～鎌

倉間の「江ノ電」沿線に人知れず潜んでいる「妖怪」たちを発見、マンガやイラストを制作し、展覧会や似顔絵イベント、さらには「妖怪電車」に自作の妖怪コスプレで搭乗する、という愉快で地域に役立つ活動を展開しました。

まだまだやります！

マンガ学科 教授 細萱 敦



自作の妖怪に扮し江ノ電妖怪電車に乗る学生たち。左“あじさいおばあ”右“しらす侍”

卒業生のことば



菱山 瑠子 さん

大学生生活の4年間が終わりました。これでもかと時間を贅沢に使った4年間でした。厚木で2年間、中野で2年間、思い出がたくさんあります。そんなことを言いつつ思い出せるのは、帰路のバスと電車ではよく寝たなあなんてことです。特に雨の日のバスなんかは、窓ガラスの雨粒、街灯や建物の灯りがふんわりとしていて好きだったように思います。

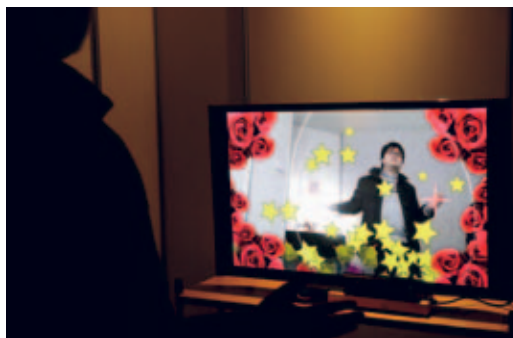
マンガ学科は面白い講義がたくさんありました。その中で印象的な出来事があります。3年時、マンガ作品を研究する講義でのことです。当時は勉強のためと何となしにその作品を読んでいた。

特段好みというわけでもなく解説を聞いて頷いただけでした。ですがつい先日、好みで購入した作家の短編集の中にその作品があったのです。このとき2年の間で起きた自身の好みの変化に気づかされました。好みに限らずいろいろなモノが常に変化し、成長しているのでしょう。なんだか感慨深かったです。お世話になった先生方、友人、両親には感謝の限りです。

私は現在仕事でマンガを描かせていただいています。スタートラインを踏み切ったばかりです。まだまだ先があります。過ぎた4年を背に、堂々と走っていこうと思います。

大学院 Graduate school 卒業展

▶ インタラクティブメディア領域



「Interactive Percussion Magic」 大澤 佑太郎



「マンガのデジタル映像化における電子書籍の新しい可能性」 CHEN KEXIN

▶ 映像メディア領域

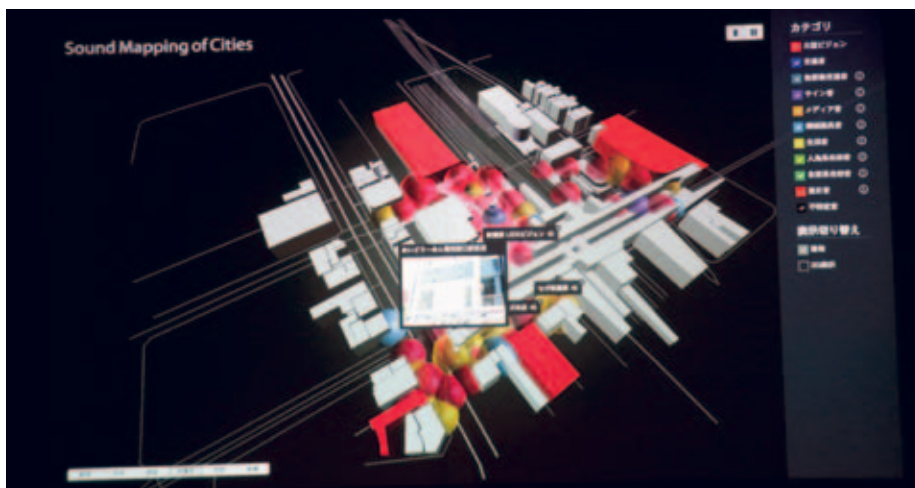


「Waiting for Tasuke」 陳 啓岩

▶ アニメーションメディア領域



「For You」 JIANG YI



「Sound Mapping of Cities」 三上 航平

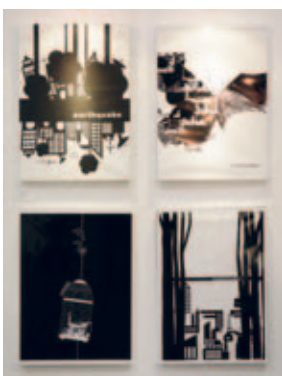
寄せて
作品に

都市の大型ビジョンとその周辺の音風景の構造を情報空間上に可視化した作品です。都市の大型ビジョンは待ち合わせ場所などにも使用されるなど、ランドスケープとしての意味も大きいと同時に、都市のサウンドマークとしての意味も大きいと考えています。その周辺は複雑な音風景を形成しており、それらの要素を

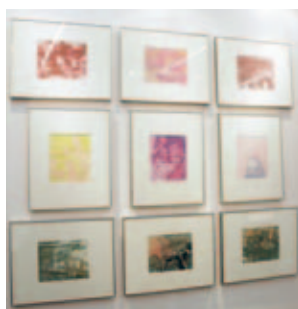
フィールドワークにより分析しました。鑑賞者は可視化された音の要素を選択することによりそれぞれの音を聞くことができ、重ね合わせることで独自の音風景を生成することもできます。また、アプリケーション内で用意された機能を使い、様々な視点から可視化された音の要素を見比べることができます。

▶ デザインメディア領域

「Earthquake Thunami」 馮 謹愷



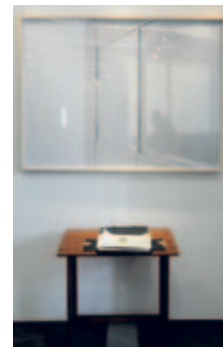
▶ 写真メディア領域



「峠」 蔣 沫琳



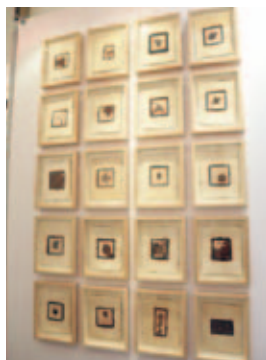
「皮の中には運命が詰まっている／既読」 小林 美加子



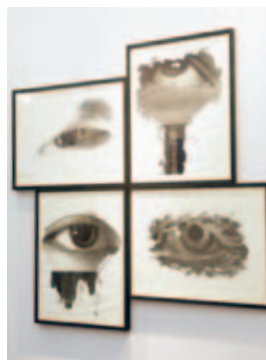
「薄いカーテン、私はベッドに横たわる。」 中村 悠希



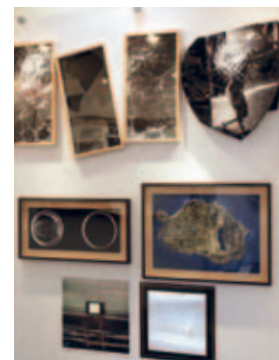
「紅豆 - Eternal Red」 姜 薇



「Dystopia」 今野 竣介



「美しい嘘」 余 澄



「Stray Sheep」 廣田 貴

大学院のトピック

大学院芸術学研究科メディアアート専攻のこの一年

東京工芸大学大学院芸術学研究科は、日本でも稀なメディアアート表現及び諸関連芸術理論の分野に特化した大学院教育の場です。1994年の東京工芸大学芸術学部の発足に続き、1998年に大学院芸術学研究科としてスタートし、現在では、写真メディア、映像メディア、デザインメディア、インタラクティブメディア、アニメーションメディア、ゲームメディア、マンガメディア、芸術学の8領域からなる博士前期課程(修士課程)と、さらに上位の博士学位の取得を目指す博士後期課程(博士課程)を擁する、まさにメディアアート表現研究における総合的かつ特殊専門的な最高水準の教育研究拠点としての役割を担う存在となっています⁽¹⁾。

担当教員による日常的な指導はもちろん

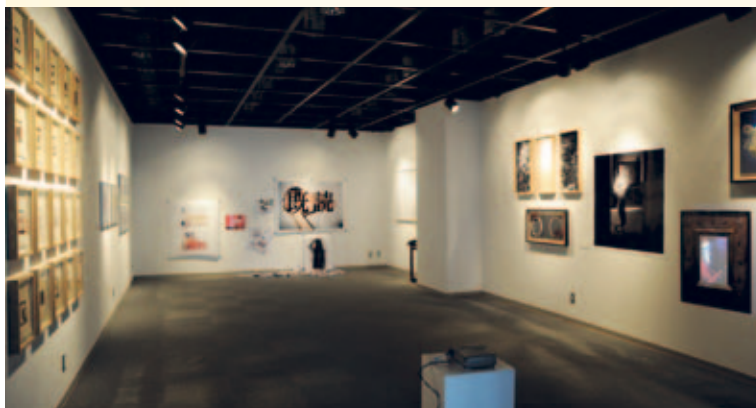
ですが、1年次後期末(1月頃)に領域ごとに分かれた報告会を通じて、学生は同じ領域にある他の教員と意見を交わす機会を経て、2年次前期末(7月)には専攻全体での「学位論文/作品 中間発表会」に臨むことになります。本年度は7月31日(金)に実施されました。8領域がひとつにまとまっているという本大学院の特性をいかし、発表した学生それぞれに他領域の教員からもたくさんの貴重な助言や指摘があり、学生が研究最終盤の2年次後期を迎えるにあたり、これまで以上に広い視野に立って自らの研究を深める契機となっています。そして後期末の学位審査を経て、2年間の研究成果の発表の場、「学位論文/作品 最終発表会」が2月17日(水)に実施されました。今年度よりはじまった新しい試みとして、学内各所をつ



かって事前に学位作品の展示と上映を行ないました。このことによって、発表会の場でもこれまで以上に深く鋭い指摘や具体的な助言をいただくことができ、本学での学びを終えてもつづく、今後の活動に向けての指針もしっかりとつかむことができたのではないかと思います。

大学院メディア領域 准教授 圓井 義典

(1) 東京工芸大学ホームページ「大学院芸術学研究科概要」参照。http://www.t-kougei.ac.jp/graduate/arts/



卒業生のことば



小林 美加子 さん

ずっとこの生活が続いていくような、そんな気がしていましたが、工芸大の学生でいられる時間もあと僅かになってしまいました。まだまだ先だろうと思っていた「卒業」という言葉がわたしの心の奥で現実を帯びて、ざわざわとしています。今までの6年間の自分の写真に対する想いや制作に対する態度を省みるときに、決して完璧とは言えませんでした。

真面目に取り組んだ時もあれば、自信をなくし、悩み、手を止め、他のことを楽しんだ時期もありました。しかしふとしたときに考えるのは写真の

ことで、その度に、ああ、わたしはやっぱり写真が好きなんだと再認識するのです。たくさん悩んで立ち止まった分、わたしの得たものは大きく、深いものであったと確信しています。

上手くいかないときでも前向きにいられたのは、熱心な指導をして下さった先生方や、切磋琢磨し合える友人、支えてくれた家族の存在があったからです。本当にありがとうございました。これから先も工芸大で得たものを大切に、真摯に写真と向き合っていたい。そう思っています。

平成27年度 学位授与式 卒業祝賀会



2016年3月22日、中野サンプラザで平成27年度学位授与式と卒業祝賀会が開催されました。学位授与式で同窓会田沼武能会長はここ数日來の報道から人工知能の活躍《囲碁の王者に勝った》《文学賞の一次選考通過》を引用され、以下の様な式辞を述べられました。

かつて写真の撮影はそれを学んだ者だけにしか撮れない難しい技術だった。しかしカメラの進歩により誰でも失敗無く写真が撮れる現在、プロ写真家は「上手く写っちゃった」ではなく、明確な意思の基に第3者に感動を伝える創作力が求

められている。職人技は機械に取って代わられる。魂で撮るといふ機械には立ち入れない領域で、自分ならではのものを掘り活躍し発展し時代に打ち勝って行って欲しい。写真を例にしたが、創作活動に携わる全芸術学部卒業生に共通する事だ。常に夢と希望を高く掲げ前進する様に。

会場を移して開かれた後援会と同窓会共催の祝賀会は立食パーティで進行し、ゼミの先生を囲んだり、思い思いの仲間達との談笑に花が咲きました。恒例の学科コース毎の集合写真を撮影しお開きとなりました。





● 集合写真とスナップは下記で2016.8.31まで閲覧とダウンロードが出来ます。
<http://www.kougei-dousoukai.jp/board>

|土屋下宿の会

写大から紹介された土屋下宿は中野新橋にあり四畳半二人部屋二食付き、1・2年20数名での共同生活でした。その仲間(39・40期の山形県守屋氏、静岡県武智氏・鈴木氏、長野県市川氏、岡山県長瀬氏、京都府安岡氏、大阪府山本氏・倉橋)8名が6月2日新大阪に集合。昼食からビールと串カツで盛り上がり、落語家と行く浪速探検クルーズで浪速の町を楽しみ、兵庫県の有馬温泉で一泊。翌日は、ロープウェーで六甲山を散策、神戸の中華街で昼食という楽しい旅でした。次回は静岡伊東での再会を約束し、新大阪で解散しました。 倉橋 正直(40期)



|工芸大30期同期会

暑い夏もそろそろ終わりかなと思われる平成27年10月7日、9回目の同期会を開催致しました。30期も80歳を超え何名集まるか気にかかる所ではありましたが23名の出席を得ました。新宿より少し離れた東新宿の閑静な料亭“がんご”(元山野愛子邸)で懐石料理を楽しみました。皆さん元気で和気合い合いとした懇親会でした。幸い当日は一日中好天に恵まれ、お開きの後には“がんご”の庭園で記念撮影を致しました。写真に写る年齢を感じさせない姿を見ると2年後の次回も皆の出席が期待出来るような感じです。 土屋 隆市(30期)



|新潟県支部総会

今年の支部総会は2015年10月29日に、写大ギャラリー40周年記念土門拳写真展「古寺巡礼」を開催中の新津美術館の会議室で開催しました。この写真展は新津美術館の企画展ですが、渡辺 関靖氏(33期)、山内 弘三氏(35期)、平賀 治雄氏(41期)の尽力により開催されました。新潟市内へ移動して開かれた懇親会では近況報告などで楽しい一時を過ごし、前支部長である堀江 真雄氏(33期)の中締めでお開きとなりました。

新潟支部長 小林 俊郎(44期)



|30期卒『旅の30会』秋色びわこの旅・漫遊記

2015年11月16～17日、晩秋の湖東に『旅の30会』のメンバーが集合。世話役の福岡氏、貝塚氏、松本氏と河相氏の協力により休暇村近江八幡に泊り、卒業後60年の年輪を刻んだ私達が学生時代に戻った楽しい2日間を過ごしました。1日目は豊臣秀吉が築いた近江八幡市で近江商人を偲ばせる町並みや八幡堀を見学。ホテルでは近江牛のすき焼き食べ放題を満喫。翌日もひこにゃんの出迎えを受けた彦根城や町並みに近江商人の気概を感じた旅でした。今秋は同窓会90周年記念行事に合わせて東京で開催予定です。多数の参加を期待しています。 松本 一馬(30期)



|40期同期会

3科合同の同窓会は、新たな視点で全面整備された中野キャンパスの見学をかねて2015年10月23日に行われた。卒業後50年、それぞれの人生を歩んで集まった70歳以上の面々。会場が懐かしい中野校舎とあって、道中の一歩一歩が感慨深い。キャンパスは明るく開放的で空に連続するかのような空間は、学校というよりアメニティを意識させる。少子化で消えていく学校も多い中、設備も充実して時勢に適う変化を遂げた母校。誇らしさと共に深まる愛着を共有できた一日だった。 馬場 玲子(40期)



|36期写真工業科クラス会 金沢の旅

秋の金沢…地元推薦の所々を巡りました。中でも印象深かったのはひがし茶屋街の懐華楼^{かいがろう}で茶屋文化に触れられたことでした。“一見さんお断り”のなか、光画社近岡さんのご尽力で実現したものです。艶めいたお座敷で正に宴も始まろうかとしたとき、灯が消え一瞬の静寂に包まれました。洩れ聞こえる笛の音…お茶屋独特のおもてなし“影笛”とのことでした。加賀料理、芸妓の舞、三味や太鼓など楽しい宴となりました。「90周年式典」での再会を約し、帰途につきました。追伸；その後近岡 房治氏は心筋梗塞にて急逝されました。ご冥福を祈り…合掌。 佐土原 一浩(36期)



|34期写真工業科同期の集い

毎年12月の第2土曜日を同期会の日と定め、以来絶えることなく開催してきた忘年会ですが、今回も新宿三丁目「木曾路」で開催いたしました。幸いなことに今回は、仙台市からの参加もあり、合計13名の出席を得て、賑やかに昔話に花が咲きました。お互いにそれなりに歳をとっており、今後ますますの体調管理が重要との言葉に納得の一同でした。なお今年も、相澤 忠勝・末次 祥宏の両氏を幹事役として、2016年12月10日(土)13時から新宿「木曾路」で開催いたしますので同期生はご予約ください。

川名 晴美(34期)



|写大山岳部

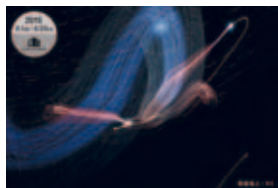
写大山岳部OB会と工芸大山岳部(現役学生)との交流が始まりました。ヒマラヤ初登攀を成功させた工芸大山岳部の木村 健太君(えんのき89号に掲載)より「写大山岳部50年史」を見て連絡があり、早速12月23日に初顔合わせをして交流が始まりました。その後OB会の新年会に現役を招待、富岡八幡宮参詣のあと懇親会を賑々しく開催しました。交流が深まりつつあり、今後が楽しみです。

写大山岳部OB会顧問 中野 慶一(27期)



展示会・出版の記録

展：展示会名 作：作者 所：場所 期：会期



展：花火
作：刑部 信人(82期・写真学科)
所：OVER THE BORDER
期：2015.8.1-23



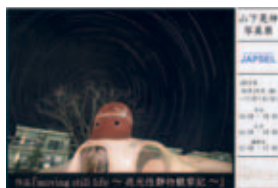
展：Taiwan Photo Fair 台湾攝影藝術博覽會
TAIWAN PHOTO 2015
作：甲田 智恵(77期・写真学科)
所：新光三越台北
期：2015.10.1-4



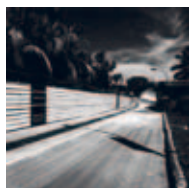
展：絵崎悠maya takeuchi ひととき展
作：林 友紀(90期・マンガ学科)
竹内 摩耶(90期・写真学科)
所：伊左衛門
期：2015.10.1-13



展：新進気鋭のアート作家展
作：小池 莉加(4年) 今野 竣介(大学院2年)
橋岡 慶崇(大学院1年) カッコ内は開催時
所：アक्सィスギャラリーシンポジア
期：2015.10.13-18



展：moving still life～夜光性静物観察記
作：山下 晃伸(82期・写真学科)
所：HATCH
期：2015.10.23-11.1



展：in the wind
作：内藤 明(47期・写真技術科)
所：スタイケントーキョー
期：2015.10.30-11.4



展：東京工芸大学出身の
若手作家写真展
「40×40」
作：小林 紀晴(63期・写真技術科)
薄井 一謙(73期・写真学科)
本城 直季(77期・写真学科)
高木 こずえ(82期・写真学科)
所：写大ギャラリー
期：2015.11.9-12.22



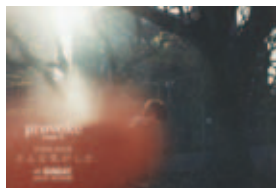
展：働いて働いて…今
作：那須川 富美男(50期・写真応用科)
所：富士フィルムフォトサロン東京
期：2016.1.22-2.4



展：のぞく展
作：藤田 新井・青柳 萌々(デザイン学科)
所：gallery freak out
期：2015.11.27-29



展：伊勢佐木町ブルース
作：松田 沙也(女子美術大学)
新田 真弓(デザイン学科4年)
所：Art Baboo146
期：2016.1.9-22



展：そんな気がした
作：伊澤 絵里奈(86期・写真学科)
所：at SUNDY
期：2016.1.9-31



展：新宿迷子
作：梁 丞佑(79期・写真学科)
所：ZEN FOTO GALLERY
期：2016.1.15-2.10



展：The world of white snow
作：國本 光子(79期・写真学科)
所：新宿Nikon Salon・大阪Nikon Salon
期：2016.1.26-2.1 / 4.21-27



展：堰を切らぬ厩
作：Atsuto Shimada
(嶋田 篤人/86期・写真学科)
所：Pond Gallery
期：2016.2.14-21



「さあ、写真をはじめよう 写真の教科書」
大和田 良/勝倉 峻太/岸 剛史/木村 崇志
船生 望/園井 義典 共著
出版社：インプレス



「私たちのしごと
＝障害者雇用の現場から＝」
小山博孝(40期)
出版社：岩波書店

展示会名	場所	会期
映像造形領域 3年生進級制作展	中野キャンパス 芸術情報館	2015.12.19-20
はくはつ 東京工芸大学大学院芸術学研究所マンガ メディア領域1年生展	中野キャンパス3号館	2015.11.20-27
日本大学芸術学部写真学科×東京工芸大 学芸術学部写真学科	キャン オープンギャラリー2	2016.2.5-3.8
写真学科スペシャル	中野キャンパス	2016.2.8-13
東京工芸大学芸術学部写真学科 肖像写真研究室作品展2016	ポートレートギャラリー	2016.2.11-17
東京工芸大学芸術学部卒業・大学院修了 制作展2016	秋葉原UDX 中野キャンパス	2016.2.26-28
地下水脈-東京工芸大学アニメーション学科 渡辺・小柳ゼミゼミ展2016	新宿眼科画廊	2016.3.18-20

展示会名	場所	会期
いま、わたし 東京工芸大学写真学科 小林紀晴研究室 ゼミ展	Roonee 247 photography	2016.3.15-20
Mapping Animation Playing 東京工芸大学芸術学部アニメーション学科 橋本研究室	中野キャンパス マイブリッジシアター	2016.3.11-13
OLYMPIC MUSIC GO! 東京工芸大学芸術学部アニメーション学科 2015年度ヤマナカゼミ作品上映・展示会	中野キャンパス マイブリッジシアター	2016.3.11-13
Recommend展2016	ニコンサロンbis新宿	2016.3.5-7
東京工芸大学芸術学部アニメーション学科 木船ゼミ展2016	中野キャンパス	2016.3.4-6

24期の山本さんが2015年度「現代の名工」に選ばれました

この度、昨秋11月、卓越した技能者(厚生労働大臣賞)を受賞するに当り、種々ご配慮賜りありがとうございます。

昭和21年、工芸専24期生として入学以來現在まで寫歴70年を親父のあと2代目

としてスタジオ営業写真家として歩んで参りましたが、かたわら創作的作家活動にも精力的に学んで参りました。この山岳写真は、立山大日岳を撮影した作品です。冬山の未だ5~6m積雪の雷鳥山荘から夜明け

前の真暗な中、懐中電灯を頼りに徒歩現場に到着。夜明けの時間待ちの後、幸いに天候に恵まれシャッターを切った貴重な写真です。日本写真協会の斡旋で世界山岳写真コンクール最高賞(バターカップ賞)をいただきました。以後ひたすら活動を続け現在に到っております。写真の現状もフィルムアナログからデジタルフォトに180度轉換してまいりましたが、今後これを見極めながら、残りの人生を過ごしてゆきたいと念じておる昨今です。ありがとうございました。



代表作「大日岳」



山本 吉男(24期)

第5回 同窓会韓国支部総会を終えて

韓国支部では2016年3月、5回目の総会と6回目の展示会を行いました。今回の総会と展示会には同窓会本部から板垣さんが参加して下さいました。また、展示会は[Tokyo-Seoul]をテーマにソウル仁寺洞のギャラリーTOPOHAUSで3月9日~15日まで開催しました。日本から参加の4名(板垣さん、佐藤さん、卒業生のヤンスンウ、大学院生のオゼウン)を含め10名の作品が展示されました。

今年、韓国支部には新会員が3人加わりました。去年の映像学科とマンガ学科の卒業生とFacebookに載せた同窓会の写真を見てつながった2008年映像学科卒業生です。久しぶりの後輩達は大きな励ましになります。来年の展示会には写真以外の作品が見られる事になりそうですし、写大卒業の先輩達もより多く参加される予定ですので期待していただけます。また、工芸大の写真学科に入りたいと言う高校3年生からの連絡がありまして留学中の学生と連絡出来るようにしました。

初めてのソウルと短い日程でも明るく喜んでくれた板垣さんに感謝します。畑先生、次にはご一緒できます様に元気でいてください。

韓国支部長 韓 承卓(73期)



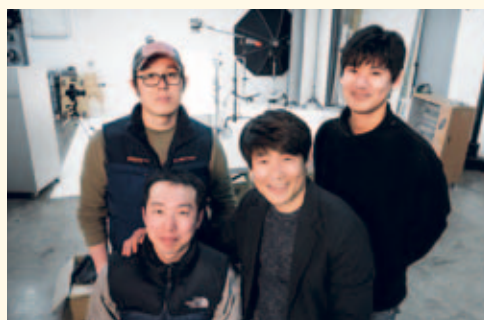
韓国支部の皆さん(TOPOHAUS)

李さん訪問記

ソウルで一番おしゃれな街、内外の有名ブランドが軒を連ねるカロスビル通り近くにコマースタジオを構える李泓珍さん(イ・ヒョンジン68期・写真技術科)を韓承卓韓国支部長の案内で訪問しました。

李さんは大学生までは趣味で写真撮影をしていましたが商業写真で身を立てる事を決意して写大へ入学されました。在学中からアーバンスタジオやフリーカメラマンの助手などをしながら研鑽を重ね、卒業前にはその撮影技術の高さから就職内定を得ました。しかし就労ビザが発給されないという現実と直面し、業界の人脈が全く無いソウルでのスタートをばざるを得ませんでした。それからの努力と成功は、3年という異例の速さでの独立、5mの天井高を有する二面のスタジオ、そして通路の壁面いっぱいには貼られたSAMSUNGなど韓国

を代表する会社の商品や紙面を飾るモデルの写真が雑弁に物語っています。李さんは次のようにも話されました。「光の使い方でもどのようにも変わる、表情が変わっていくのが面白い」「クライアントからの依頼があれば物であれ人物であれ渾身に取り組み、それがまた勉強になり技術を高めてきた」「いつも大きな希望がある。だからつらいと思ったことはない」



李さんとViséeスタジオのスタッフカメラマン

写大で出会った友人と韓国や日本各地を旅した事、吉村先生、粟津先生に教えていただいた技術科3研では毎月パーティーがあり李さんが韓国料理を、中国からの学生は中華料理を作って盛り上がった事などが留学中の楽しい思い出と語ってくれました。

李さんの今後の活躍を楽しみにスタジオを後にしました。

板垣 雅春(49期・広報委員長)



韓さん 李さん 板垣

訃報

衷心よりお悔み申し上げます。

阿由葉 八郎 (20期・芸術科)
 大辻 清司 (20期・芸術科)
 秋山 萬里夫 (20期・理学科)
 磯野 敬一 (20期・理学科)
 福島 誠二郎 (20期・理学科)
 清岡 良一 (21期・写真光学機械科)
 齋藤 謙雄 (21期・写真光学機械科)
 久野 脩 (22期・光学機械科)
 後藤 正明 (26期・写真工業科)
 服部 広秀 (27期・写真技術科)
 本多 一央 (27期・写真技術科)
 遊佐 武文 (27期・写真技術科)
 星合 重男 (29期・写真技術科)
 松尾 芳彦 (29期・写真技術科)
 藤田 巖 (30期・写真工業科)

瀬古 和宏 (32期・写真技術科)
 渡辺 関靖 (33期・写真技術科)
 池田 孝一 (34期・写真技術科)
 宝井 貞雄 (34期・写真技術科)
 濱野 博充 (34期・写真技術科)
 京極 浩吉 (35期・写真技術科)
 加藤 美穂子 (36期・写真工業科)
 近岡 房治 (36期・写真工業科)
 高橋 満男 (39期・写真印刷科)
 嶋田 瑠璃子 (40期・写真技術科)
 天野 勲 (40期・写真印刷科)
 中村 東 (40期・写真印刷科)
 片山 一郎 (41期・写真技術科)
 金子 良二 (42期・写真印刷科)
 太田 美穂子 (43期・写真技術科)

栗野 敬子 (43期・写真技術科)
 平田 一 (43期・写真技術科)
 渡部 眞一 (43期・写真技術科)
 山崎 公義 (44期・写真応用科)
 須山 正子 (45期・写真印刷科)
 堀 眞一 (45期・写真技術科)
 川代 陽子 (48期・写真技術科)
 伊佐次 和輝 (50期・写真応用科)
 熊上 恵子 (50期・写真印刷科)
 遠藤 恵美子 (55期・写真応用科)
 清水 貴久 (62期・写真技術科)
 大八木 薫 (68期・写真技術科)
 高梨 佳織 (68期・写真応用科)
 藤本 周 (73期・映像学科)

(卒業期順・敬称略)

ドメイン／アドレス変更

4月から同窓会のホームページがリニューアルされました
 新しいURLとアドレスは下記のとおりです

ホームページのURL <http://www.kougei-dousoukai.jp>

事務局メールアドレス dousoukai@kougei-dousoukai.jp



- 住所などの変更届が簡単になりました
- 記事を募集中 メール、電話、FAXなどで事務局までどうぞ
 「作品展」・展示、出版、様々なメディアでの発表などをお知らせください
 「掲示板」・同期会等の予告や皆様からの発信をお載せします



編集後記

同窓生のみなさまはじめまして。芸術学部89期卒業の長田夏実です。

写真学科を卒業後、写真店に勤務時にご縁あって諸先輩方とともに、ひろば制作などに携わることになりました。どうぞよろしく願い申し上げます。

私が学生のころは工事中だった新校舎も、現在では見違えるほど綺麗になり、卒業生として大変喜ばしく思っております。

私事ではありますが、先日イギリス・ドイツに旅行した際に博物館や美術館、世界的にも有名な建築物などのアート作品に触れ、沢山の貴重な経

験をしました。ふと学生のころ展示を見に行った時に感じたわくわく感を思い出し、懐かしい気持ちになると同時に、社会人になってから、作品にあまり触れていなかった事に気付かされました。卒業後も大学を訪れる機会を頂いた今、学生の頃に感じたエネルギーなイメージや作品に再び触れられる事をとても嬉しく思っております。

いつもひろばをご愛読いただいているみなさま、今後ともよろしく願い致します。

長田 夏実 (89期・写真学科)